日刊 動労千葉
82, 12, 29
No. 1232
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四三（二二）七二〇七

## 政府自民党・国鉄当局・革マルによる国鉄労働運動つぶしと全面対決

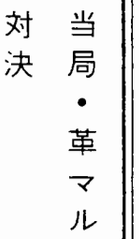
新小岩支部執行委員長　松崎　靖

国鉄労働運動つぶしを究極の目的として、一月から始まったマスコミを総動員しての、「ヤミ、カラ、悪慣行」のキャンペーンと第二臨調の「民営・分割」構想、職場規律の乱れを理由としての現協制度の改悪攻撃、乗車証制度の改悪など既得権の一方的剝奪等、国鉄労働者にとって耐えがたい年でありました。

自民党は、大企業と共に作り出した「国鉄赤字」の真の原因を国民の目からおおいかくすために「労働者が働かない」のが赤字の原因」「現協制度が諸悪の根源」として攻撃をかけ、国鉄当局も、マル生以後の職場における力関係の逆転を狙い、国鉄労働組合運動を分断をする攻撃を強めてきました。それは、57・11ダイ「改」協定、現協協約に現象として現われ、特に、動労「本部」反動分子の当局の尖兵としての役割りは厳しく糾弾されなくてはならないと思います。

三人勧、仲裁で、公労協と公務員労働者の分断、公労協内部の分断をするやり方は、三里塚反対同盟に対して「成田用水」問題と二期着工へ向けて同盟を内部から分裂を図る手口と同一のものとしてはっきりと見ることができます。

このように、政府、自民党、財界が自らの体制を守り抜くためにはあらゆる手段を使って攻撃をしてくるという彼等の本質が労働者の前に明らかにされた一年でありました。



## 革マルの追放・一掃なくして　闘いの勝利はない

千葉運転区支部執行委員長　永田雅章

千葉運転区支部は、81・3ジェット斗争の地平を継承し発展させる立場から「三里塚」「国鉄」を基軸に日帝の軍事大国化・改憲攻撃と真向から対決できる組織体制の確立をめざし全力で斗い抜いてきました。

一年間の闘いを振返って見るならば、三里塚斗争は、成田用水をテコとした、「82年用地問題解決し83年着工」という敵の総力をあげた反対同盟分断破壊攻撃に対し、反対同盟は17年間の基本路線を堅持し、10・11斗争の大勝利をもってこれを粉砕し、83年決裁へ前進を開始している。また、われわれ国鉄労働者も、臨調ー国鉄労働運動破壊のための反動攻撃に対し、「57・11」ダイ改斗争で職場から「国鉄」の斗いに全面的な「スト破り、斗争破壊」等々でことごとく敵対してきたのが革マルだ。革マルは83年本番を迎えようとしている。こう「三里塚」「国鉄」の斗いの勝利がないことも、すべての人々に明らかとなった。われわれは「革マルを許すな！革マルを倒せ！」と立ち上った多くの国鉄労働者と共に断呼斗う。

▽　◇　△

## 各支部長に聞く③

# '82闘争を ふりかえって

## 「三里塚」「国鉄」——この二大拠点を——一つに闘いぬく——

津田沼支部執行委員長　山下幸

本年、初頭からマスコミを反動的に利用した、ブルトレ問題を「ヤミ、カラ手当」と称して、国鉄労働者功撃をかけ、一年を過ぎようとしています。

この攻撃は、「国鉄赤字」があたかも国鉄労働者に責任がある様な宣伝をしているが、真の狙いは赤字解消ではなく総評労働運動の主軸である国鉄労働運動の解体、労働運動総体を産報化し、日帝、支配体制の危機を軍事大国化、改憲をもって打開延命せんがための攻撃であり、支配体制と労働者階級の死活をかけた闘いでありました。

労働運動総体が産報化する中で、国鉄労働運動が原則的闘いをもって反撃することがとわれていました。しかし、この間の「ブルトレ」、「57・11ダイ改」、「現協」、「乗車証」、「年末手当」等をめぐる国鉄当局との攻防過程の中で、動労「本部」革マルは「働こう運動」を方針化し、情勢が厳しいからと臨調、国鉄当局の先兵として、闘う国労や動労千葉の闘争圧殺策動を強めてきました。

われわれは、日帝の攻撃が「国鉄」、「三里塚」を焦点にしている以上、この二大拠点を一つのものとし闘い抜いてきた一年間と言えます。

**全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！**